



障害者への気配り

■ 遠藤 謙

日本は古来から相手のことを思いやり、気遣うことが美德とされているが、行き過ぎた気配りが逆に相手に不快感を与えることもある。その顕著な例の1つに障害を持つ人に対する気配りがあげられる。

「障害」という言葉は以前は「障礙」と表記されていた。「妨げる」という意味の「礙」が略字の「碍」になり、戦後の常用漢字制限で「害」と表記されるようになった。しかし、読みは同じでも「妨げ」と「害」では、受ける印象はかなり異なるため、「障害」を「障碍」かあるいは「障がい」と表記しようという考え方がある。私自身、講演のときに「障がい」と表記していたのだが、知り合いの股離断患者の方に、「障がい」という言葉は逆にはれものに触れるような表現だということを言われ、はっとしたことがある。自分では障害というものに対して真摯に向き合っていると思いでいたのだが、実はこういった配慮が逆に相手を不快にさせるときもあるということを知ったのだ。

先日ツイッター上で子役俳優のはるかぜちゃんが「乙武先生とだるま先生は似ている」と発言したところ、多くの方から「それは不謹慎な発言だから控えるべき」「不快な発言だ」との返信が殺到した。乙武先生とは、先天性四肢切断の障害を持つ乙武洋匡氏のこと、だるま先生とはだるまをモチーフにした明光義塾のキャラクターである。まず、「だるま先生と僕が似ている」と言いだしたのは、乙武氏本人であり、乙武氏とはるかぜちゃんは以前か

■ 遠藤 謙

ソニーコンピュータサイエンス研究所
アソシエイトリサーチャー

ロボット技術を用いた身体能力の拡張に関する研究に携わる。また、途上国向けの義肢装具の開発、普及を目的とした D-Leg の代表も務める。



ら交流があり、信頼しあう友人である。彼女もそうした事情は何度も説明したが、それでも「不特定多数のしている場所で、誤解を与えるような発言をすべきではない」「この発言を読んでも不快になる人もいる」と食い下がる方が多数いた。つまり、乙武氏以外の四肢のない人が読んだら、傷つくのではないかという先回りした配慮である。乙武氏はこうした気配りを逆に障害を意識しすぎた配慮として不快に思っているのである。まだまだ障害というと目を背ける人も多いが、乙武氏のような自分の障害を自分の1つの特徴として前向きにとらえている方も増えてきている。もちろん、障害と一言でいうとあまりにたくさんの症状があり、一概には言えない部分もあるのも事実である。

私は義足の研究をはじめたときには、心のどこかで身体障害者を同情する気持ちがあった。しかし、競技用義足を用いたアスリートの走りをはじめて見たとき、足がないことによって生まれる大きな可能性も感じた。それから、身体障害を損失としてではなく、新たな機能を付加できる余白としてとらえるようになった。さらに失われた機能の補間だけでなく拡張が可能になると、健常者と障害者の比較は無意味になる。私はエンジニアとしてこのような変革の一端を担いたいと思っている。私がこのような文章を書くことによって不快に思う方々もいると思う。そのような人たちの意見こそ真摯に受け止めていきたい。

